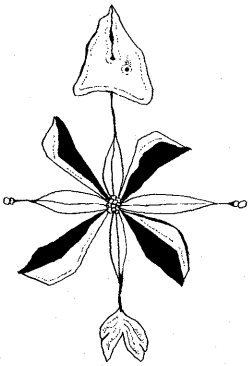
こだわらないことへのこだわり

中村　憲治



こだわりには、知らず知らずの内に持っているものと、自ら意識的に持っているものとがあると思いますが、私はかつてその両方を持ち、そしてそれにあるきっかけによってこだわらなくなったという経験があります。そのことをここでお話ししたいと思います。

二十歳頃の私は、かなり極端な固定観念を持ち、それを疑うことすらしませんでした。私の父も祖父も東大出のエリートでした。母方は学者の家系で、母も津田の英文科を出ていました。絵に描いたようなエリート家庭に育った私は、知らず知らずの内にエリート意

識だけを身に付けていたのです。しかしながら生来腕白だった私は、高校の時、体力を持て余すとろくなことはないと思ったらしい父の勧めもあって、野球部に入り、三年間野球漬けの生活を送ったのですが、気が付いてみると勉強の方は気が遠くなる位遅れていました。そして当然の如く浪人をしました。そんな時父が「そろそろこんな本も読んでみろ」と言って、私の机の上に井出隆の『哲学以前』を置いていったのです。エリート意識に体育会系単純思考がプラスされていた私にとって、その本は大変な衝撃でした。はっきりとした内容はもう覚えていませんが、絶対といえるものなどない、ということ、そしてまず信じているものを疑うところから始めろ、というようなことが論理的に非常に説得力のある言葉で書かれていたように思います。読み終わった時、私の内部でそれまでの一切のものが、ガラガラと崩壊していくのが分かりました。そして精神空間の無限の広がりを感じました。その時の戸惑いと感動は、今でも忘れることができません。それからの私は、むさぼる様に色々な本を読みました。そして自ら思考することの苦しさと嬉しさを噛みしめ始めたのです。心の底から『哲学以前』に感謝しました。その思いは、今も変わりません。

もう一つ、今度は意識的に持っていたこだわりにこだわらなくなったお話をします。

私は、子どもの頃から生き物が好きでした。犬や猫はいつも飼っていましたし、その他

にも金魚や鯉、小鳥や虫や蛇まで飼ったことがありました。犬や猫は友達みたいなものでしたが、眺めていて飽きないのは、池の金魚や鯉でした。一尾〈〈顔も違うし、個性も違うのです。そして春、池に棕櫚を入れておいてやると、卵を産みつけます。それを別の水槽で孵すと、無数に稚魚が孵ります。でも成長するのはせいぜい五、六尾でした。ある程度大きくなったら池に入れてやる。猛烈な生存競争を生き残った彼らは、池でも順調に育ち、二、三年で親達と同じ位の大きさになります。大袈裟に言えば、そこに生命のドラマを見るような気がしていました。そんな私でしたから、当時は釣りが大嫌いでした。平和に泳いでいる魚を騙して針にひっかけるなんて、まっとうな人間のすることじゃない、と思っていました。まして他に食べる物がいくらでもあるのに、釣った魚を食べてしまうなんて、文明人のすることじゃない、とまで思っていたのです。

ところが私が大学院の院生だった頃、父が鬼怒川のほとりに別荘を建てたことがそのこだわりを捨てるきっかけになったのです。私には釣り好きの友人がいました。彼がこの別荘建築を、我が事のように喜んだのです。勿論彼は釣りをする気なのです。そして私に釣り竿までプレゼントしてくれたのです。こうなると一度位はいやでも彼の釣りに付き合わないわけにはいきません。そしてその日、まだ夜が明けぬ内から彼は喜々として私の仕掛けまで作ってくれました。そして歩いて二、三分の川まで行きました。やっと浮きが見える位の明るさです。場所を決め、彼がエサを付けてくれた仕掛けを投じました。二、三投

目に浮きがピクピクと動いた後沈みました。軽く合わせをくれる、すると手に魚の動きが伝わってくる、そして取り込む、手の中に可憐な雄のオイカワが踊っていました。そして三尾目が釣れた頃には、もう夢中になっていました。エサも自分で付けるようになっていました。そしてすっかり陽が登った朝の九時頃に、大きな感動と深い満足感につつまれて別荘に魚籠（びく）を下げて帰って来たのです。もうこだわりなどすっかり忘れていました。これは本能に根ざした喜びだ、この喜びにはとうてい逆らうことはできないと、この時私は思いました。それから彼と私は、暇さえあれば別荘に行って釣りをしました。釣った魚を食べたことは言うまでもありません。以前だったら考えられないことですが、自分で釣った魚を調理する楽しささえ、知ってしまったのです。その後私は、釣りバカの仲間入りをしました。色々な釣りをやっています。そして以前と変わらず生き物好きでもあります。でもその「好き」が、少し変わったようです。山で野兎等を見かけると、可愛いいな、と思う一方で、ごく自然に「おいしそうだな」と思うようにもなってしまったのです。

以上の経験から私の場合は、こだわらなくなることによって、新たな世界が劇的に開けてきたので、それ以降、三匹目、四匹目のどぜうを求めて、こだわらないことにこだわるようになった、というわけなのです。

（大学講師）